第386号 昭和52年8月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和52年（1977年）
8月号（No. 386）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

目　次

大峰・大台からのアピール
——自然保護委の視察行——
（渡辺公平）……（1）
学習院山岳部の足跡……（2）
——第5回山岳史懇談会——
谷川連峰越後側登山道の現況
（高波隆男）……（3）
美しい山（shöne berge）とは何か
（岡沢祐吉）……（4）
第31回ウェストン祭……（5）
ネパールの未解禁ピーク登山について
……（5）
自然保護情報
プロの手から盗伐・盗掘を防ごう
（葛貫一雄）……（6）
ルーム基金募集のお願いと
基金応募者ご芳名……（7）
支部だより——北海道支部——……（7）
報告とお知らせ……（8）
会務報告・ルーム日誌など……（10）
カット／松本慎太郎・谷アユ子・宮下啓三

大峰・大台からのアピール

——自然保護委の視察行——

渡辺公平

大台教会にて

日本山岳会自然保護委員会は六月十一、十二日、大台ヶ原、大峰山系の自然保護の問題について視察し、つぶさにその現状を確かめて来た。大台ヶ原、大峰をめぐる自然破壊の現状はわれわれの想像を遥かに越える甚だしいものであった。

われわれはこの機会に取りあえず以下の二点を提言し、関係当局の再検討を促したいと思う。

(1)白川又川谷流域の伐採計画を再検討していただきたい。

(2)白川又川谷奥地の普通地域を特別保護地区へ昇格していただきたい。

これが十一日夜われわれ自然保護委員が大台教会山の家の集会において採択した奈良県当局及び環境庁に対するアピールである。この集会にはわれわれの他、大台ヶ原・大峰の自然を守る会の人たち、JAC関西支部の会員たちも加わり、全会一致で決定されたのである。朝日、毎日、読売、NHKなどマスコミ関係者から、もっと具体的にとか、強力にというような注文も出たが、いずれ東京に帰って委員会を開いた上、今後の方針は決定することになるでしょうということで勘弁してもらった。

白川又川谷にて

われわれ自然保護委の十四名は、十一日朝近鉄八木駅前から地元の人たちの用意してくれたマイクロバスで一六九号線を南下、伯母峰峠を越えて北山川の谷に下り、その支流白川又川に入っている林道を七キロ余さかのぼってみた。

この日先導してくださったのは吉野山岳会の米田信雄会長、本会会員であり大台ヶ原・大峰の自然を守る会の熱烈なリーダーである田村聡明、同会の事務局長の谷幸三の三氏。今度の視察の最大の目標がこの林道白川又線におかれたのは、奈良県がこの林道をさらに延長して、現在大峰山系に唯一つ残されているというその奥地の自然林を皆伐しようと計画しているからであった。大台ヶ原・大峰の自然を守る会（以下守る会に略称する）では、すでに昨年奈良県自然保護協会、奈良勤労者山岳会と協力して伐採計画反対申入書を三四八三名の署名を添えて奥田奈良県知事と小沢環境庁長官に提出している。

申込事項は次の通りだ。

(1)林道工事を即時中止すること。

(2)上流域の森林伐採計画を廃止すること。

(3)これまで進めてきた林道工事によって破壊された自然を、最大限の努力をはらって修復すること。

(4)本地域については、左記の保護計画を早急に実施すること。

㋑主稜線の両側各四〇〇メートルは特別保護地域とする。

㋺白川又川源流域は第一保護地域とする。

㋩同中流域は第二種特別地域とする。

これ以上われわれが付け加えることはあるまい。奈良県では一応五十二年度は延長工事はしないということで、この日も工事は行なわれていなかったが、林道による山の破壊の程度はすさまじい限りであった。スケールこそ小さいが南アスーパー林道、石槌山ドライブウェイ、連峰スカイラインに匹敵する壊わし方だった。林道の延長は何としてでも食止めねばならぬ。これがわれわれのその場での結論であった。

日出ケ岳にて

大台教会山の家での集会の翌日、一行は米田氏や山の家の田垣内政一氏の案内で日出ヶ岳に登った。一班は山上を周遊し、他の一班はそこから大杉谷に下る計画だったが、雨のため米田氏の忠告をおとなしく聞いて大杉行は中止。日出ヶ岳から正木ヶ原、牛石ヶ原、大蛇嵓を回った後、登ってきた道を八木に戻ることにした。

日出ヶ岳の頂上で大台教会にほとんどその半生を捧げてきた田垣内さんがつぶやいた。「せっかく登ってきても土がないんではナ」と。登山路が長い部分にわたって

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

視察する一行，中央が渡辺公平氏

か。

一昨年の秋、同じこの遊歩道を歩いたことを僕はつくづく幸せだと思ったのだが、年々こうして日本の山が自然が荒廃してゆくのかと思うと、もはや、われわれ山の好きな人間だけの問題ではない。国民全体として歯どめをかけねばならぬ段階に来ていると断ぜざるを得ない。

一同は十二日午後一時、田垣内さんなどの山の家の人々に見送られて大台山上を出発、往路をそのまま近鉄八木駅に向った。二日間にわたりお世話になった米田さんはじめ守る会の方々に心からお礼を申上げ、熱烈な保護運動に微力ながらも出来得る限りのお手伝いをさせていただきたいと念じていることを明らかにしておく。

〈参加者〉（順不同）

（本部より）島田巽、織内信彦、近藤信行夫妻、村井米子、大野俊夫、武田満子、鈴木郭之、池田智津子、木名瀬亘、皆川完一、小倉厚、山崎健、片岡浜子、渡辺公平（関西支部より）二木信次、井関扶、宗実慶子、綾戸皎、石橋正美、田村聡明、出口一良、谷田一陽、三上博民、吉村節子、林秀樹。

コンクリート舗装されていることに対する歎きと怒りの重なった実感である。奈良県ではどういう了見か、五十年度から半額国の補助を得て山上の遊歩道をコンクリ舗装しはじめた。わざわざ舗装などしなくても、いや、しない方がむしろ歩きやすい、いい山道なのだ。切石やコンクリ丸太で階段を造ったり、敷石の間をセメントで塗りつぶしたり、田垣内さんが踏む土がないと歎いたのは強烈な抗議だ。サンダル族やハイヒール族にはサービス向上だが、大台の自然を求めて登ってきた人間にとっては自然破壊もいいところだ。県は登山者のすべてが山歩きなどには全然興味を持たぬドライバーだとでも考えているのではないの

●座談会●

学習院山岳部の足跡

――第5回山岳史懇談会――

―学習院輔仁会山岳部は、日本の登山界に大きな影響を与えた華々しい活躍にもかかわらず、部報がでていないためにまとまった記録がひとつもない。昭和の五、六年加藤さんの時代になって、「山と渓谷」などにぼちぼち記録がでてくるが、特に初期の記録は断片的にしかない。板倉勝宣さんが槍の北鎌尾根の感想を慶応の「登高行」に書いているが、大正十二年八月の岡部長量さんの剣岳八ツ峰完全縦走もご本人はひと言も発表していない。大正十三年四月の岳川から天狗のコルをへて奥穂高への初登攀の記録もひとつもないが、大島亮吉さんが書いた「登高行」の簡単な記事でそれを知ることができる。松方さんも大正十一年一月に中房から燕へ登っているが、特に記録を残していない。このように私達は学習院山岳部の行動を断片的に知ってはいるが、波多野（正信）、岡部（長量）、伊集院（虎一）、松方（三郎）さんらはすべて故人となられている。

第一、学習院山岳部が何年にできたかを調べる唯一の手掛りは「山日記」だが、昭和七年版によると創立が大正九年（一九二〇）、翌昭和八年版では大正八年（一九一九）と一年のずれがあってわからなくなる。こうして、五里霧中ともいえる学習院山岳部の創立時代のお話をうかがうために、加藤泰安さんをはじめお歴々（内藤政道、福岡孝行、鍋倉英夫の各氏）にお集りをいただいたわけで、よろしくお願いします。（司会の山崎安治氏の前置き）

加藤　よろしく頼まれても困りましたなあ（笑）。まあ私がうろうろしたのが昭和三年から六年七年くらいですかなあ。その前がここにいらっしゃる内藤さんですよね。

内藤　私は岡部、波多野につれていってもらったんで、古いには古いんですけれど、組織だってお話するのは……

加藤　創立は私しゃ知りませんね。歴史の何年ていうのはぜんぜん弱いんだ。

福岡　イケシュウさん（池田秀一）には、大正十三年の穂高で岡部、波多野とビバークしたとき岡部が罐詰を落し、カランカランと落ちていってとても淋しかった（笑）なんて話を聞きました。

内藤　輔仁会雑誌にあるだろうと思いますが。学習院は焼けていないから図書館へ行けばあるでしょう。

―大正九年というと山岳部は慶応しかなかったんじゃないですか。

内藤　その頃は学習院の山岳部というのはなかったんだと思いますね。旅行部といって、そのなかで山に行く人とかスキーの人とかで、いわゆる輔仁会の山岳部というのではなくて、私的というか。

加藤　そう、ないです、ないです。山桜会のできたのは昭和五年くらいかな。

―大正十年の輔仁会雑誌をみると旅行部とスキー部があり、行ってる人間は同じなんです。旅行部は阿部隈川上流とか。

福岡　いまの探険部的なことをやってますね。

―スキー部は白馬へスキー登山に行っています。

内藤　私もその時行っているんですが、白馬は登れないで小谷温泉から乙見山峠を越えて笹ヶ峰牧場の小屋に泊りましてね。妙高の外輪山を越えて関へ出ようとしたが吹雪きまして引返したんです。

―十年三月ですね。積雪期の白馬岳が登られたのはその翌月ですね。

内藤　あくる年（大正十一年）の三月、三田幸夫さんら慶応の方が立山、剣に登られる前に岡部兄弟、波多野と行きましてね、立山温泉に入りこんで十日位降りこめられたんです。行方不明とかもう

谷川連峰越後側登山道の現況

土樽山の家
高波隆男

亡父高波吾策七回忌に会員各位の御出席を戴き感謝いたします。

夏山シーズンを目前に、今年の登山道整備の状況を報告します。御承知の通り、髭の吾策は東から南廻りに西端まで、左のとおり五コースの登山道を伐開したが、残された私は、役場の予算の関係、新幹線工事等で人手不足など種々な困難に直面しつつ、何とか亡父の意志の維持に努力しています。

1　蓬峠新道　指導板　黄色
2　茂倉新道　〃　青色
3　谷川新道　〃　白色
4　吾策新道　〃　赤色
5　平標新道　〃　緑色

（右の登山案内略図進呈します）

今年の登山道整備の重点目標は谷川新道の沖ノドウキョウ沢より肩ノ小屋までと、吾策新道の井戸小屋ノ頭から万太郎山までです。なお、山の家〜清水嵓〜船窪までの尾根道は、蝮と蜂の巣の関係で廃道にして、船窪から万太郎谷を通行します。

その他は、蓬峠道の黒金沢より東俣沢出合まで、平標新道の毛渡沢出合より仙ノ倉沢出合までは、草道のため毎年刈払いして、余裕があれば蓬峠までやります。

昨年は、茂倉新道、平標新道を整備したし、谷川新道も通れるが、初心者には無理のようです。こんな現況のもとに、五本の登山道はみんな生きているが、毎年五本全部整備という訳にいかず、二三年に一回の重点でやっています。

昨年度より、町役場から草刈機や鉈鎌等の、消耗を負担してもらって、今年度は、山の清掃の名目で約三〇万円が出ると思います。

それから、五十四年を目標に、毛渡乗越より毛渡沢出合まで避難道を伐開する計画があります。これは毛渡乗越附近で事故の際、どっちへ行くにも時間と労力が過大だから出てきた計画で、新治村の方も協力体制で進めているし、湯沢町でも毛渡沢の沖ノイノマチ沢まで伐採運搬林道が整備されているのです。

亡父が造った五本の登山道に手古擦っているのに、またかと思うが、その道とこの道の性質が違うようとも思われるし、自分の立場上判断に迷っています。

会員先輩達のご意見を承りたく筆をとりました。

六・二七

死んだとか新聞に出たんで、慶応の連中とは引返す途中藤橋であいまして、大変ですよ、だいぶ写真が待ってますよなどといわれましてね。その時でしたね。かもしか鍋をやった火の粉が寝ている布団について、それ小便ひっかけて消せって大騒ぎしたのも。

―あのころの方でご存命は内藤さんひとりですか。

加藤　内藤さんは酒を飲まなかったので生きのびたが、あとはひどかったよ。

―波多野さんは小槍を佐藤久一朗さんたちと登ってますが。

加藤　こりゃちょっときつい人だったが、後輩を大事にした人だ。大酒のみで、のむと青くなって恐かったな。

内藤　東大へ入ったが昭和の初めごろ胸を悪くして若くてなくなった。

加藤　私が山岳部に入った頃はなくなっていた。あのころ山岳部てのは山登りより酒のみ会だったなあ。三ツ峠に行くのにまず大月でね、大酒のむんだ。（笑）泊って。あくる日二日がかりでゲロはきながら登ってんだからひどい部だったなあ。福岡は美少年で、ユキ、お酌というと逃げ回るんだ。

―話を戻しますが創立の年は。

加藤　私は知りませんなあ。学習院ってのはズボラばっかりいたんだから。

福岡　旅行部と重なっている時期があるんですね。そこでどこからと誰か決めなければ決まらない。もういちどそのつもりで輔仁会雑誌のなかの紀行を丹念に見ていったらわかるのでは。

内藤　大正十三年に高等科出たんですが、それまで山岳部というしっかりしたのはなかったような気がしておりますがねえ。

鍋倉　大正十五年に山岳部でスキー合宿の広告を出していますね。

カット／谷アユ子

加藤　そうすると十四年かな。

福岡　雑誌を全部洗ってコピーしておいて皆に配って、ここで気がついたことを言え、ぐらいにやらなきゃ駄目ですね。

―大変ありがたい。ぜひやっていただきたいですね。

加藤　おれより山崎君の方がずっと知っているよ。（笑）

―もっぱら慶応の人と歩いていたようですが。

鍋倉　松方さんの時分は、槇さんなんかと個人山行みたいに慶応の方といっしょに行っていたのじゃないですか。

―ずっと後になって関東学生登山連盟（昭和三年設立）に参加されなかったのは慶応と学習院だけですが。

加藤　慶応がしなかったので、昔慶応とよく歩いたんで、同じようなつもりして小生意気にもオレも入らないといって入らず、あとでわれわれ苦労したけどね。仲の悪い早稲田が音頭とりでやったから。慶応にひっついていたマメのくせに道で早稲田が来るとツバを吐いた。（笑）学習院は偉い人がみんなバタバタッと死んで、われわれの頃は孤児になってしまった。ちぐはぐな時代なんですよ。学習院山岳部そのものは割に古いんです。慶応の番頭か小僧みたいにして、チョロチョロ歩いていた。慶応は取りつくしまがなかったですね。偉くて皆しっかりしていて。子供たちなんか相手にしなかった。僕は早稲田の今井友之助さんや出牛陽太郎のところへ弟子入りして、しょぼしょぼ山登りをした。その頃いっしょだったのは折井健一とかね。早稲田には非常にお世話になっているな。

その後学連にも入らず、ずらっと出てきたスポーツアルピニズムに学習院は乗りおくれている。その頃は山岳部にはなっていたが、

●座談会●

美しい山（schöne berge）とは何か

岡沢祐吉

先輩松方三郎さんの言を待つまでもなく、スイスの学生山岳会はスイス山岳会をリードする団体だが、ここ数年シェーン（美しい）という言葉を山について使う場合、彼らがどのように理解するかで傾聴すべき意見を聞いたので参考に供したい。

総じてクラシック・ルートといわれるもの、一般ルートといわれるものは、ある登山者にいわせると評価の対象にならないとしてはずされる。彼らには登られてしまったルートは見捨てられるということにもなる。

彼らは言う。暗く、ひんやりとして伸び上がる岩壁。ボルト以外を受けつけない、攻撃意欲をかりたてるオーバーハング。高度差四〇〇メートルのスリル。各所に待ちうける変化に富むルート。何とすばらしく、そして美しいのだろう、と。

山と言えば岩と氷がつきものの

アルプス。今はやりの先鋭的登山者はこう「美しい」を表現する。

しかし山について「美しい」（シェーン）というのはそういうことではない。学生山岳会の者はそう言う。

自然とのふれ合い。自然のままの山、ごく普通に登られるいわゆる「一般ルート」にこそ「美しい」という表現を当てはめることができる。そこに美の本当の意味があるのだと言う。艱難に打ち勝ってつくられた歴史があるのだともいう。ここには人間としての一つの心がまえがあるとは私は思う。

自然と人間との調和ある生活を守ることこそ、山登りを通し、愛する国へ奉仕するスイス山岳会の伝統的姿だといっているようにも思われる。

考えてみると、好況の波にのっていたような数年前、自作のジャガ芋を掘ってきて食事に供するスイス高級官僚の家庭をふっと思い、非社交的とよくいわれるスイス人を思い出さないわけにいかない。質素なスイス人の日常生活と、われわれ日本人の生活には何か、あまりにギャップがありすぎるようにも思えたのだ。

●座談会●

ふつう夏山縦走、冬のスキーなんてもんで。

福岡　僕らはリーダーがいなかった。

加藤　上の松方さん、虎さん、そこの辺の人との間がトットと切れている。岡部、波多野が早く死んだ。次がまたバタバタッと死んで全然切れてますね。だから記録も切れている。学習院山岳部にはなんにもないですよ。（笑）どこの山岳部でも綿綿とつながっているのは少なく、十年ずつくらいは空きますね。学習院は特にひどい。人数も少ないですよ。あのころ〝健児三百〟と言ったから。

―一九三三年の山日記によると四十名となっていますが。

加藤　そんなにいやしないよ。関のスキー合宿の参加者や夏山の美少年をみんな入れちゃう。本当のところは六、七人だろうね。部費をとるためのソロバンの問題だね、これは。美少年は少しも残らなかったな。

鍋倉　学生数も少ないけれどみんなかけもちなんですよ。野球やってるのも冬だけスキーにくる。

加藤　みんなかけもちだ。おれも弓道部にいた。先生ですか。まったく山になんか興味を持ってない人ばかりです。部長は渡辺八郎先生ぐらいかな。あとはあまり山へ行く先生はいなかったな。

―乃木大将が学生にスキーを教えるのに熱心だったそうですが。

福岡　乃木さんはスキーにすっかり惚れこんじゃって、学習院はレルヒや長岡（外史）さんともつながりがあった。殉死の前にも、長岡さんにスキーのことをよろしく頼みますよ、といってその二日くらいあとになくなってます。

加藤　乃木さんはおれのオヤジとオフクロの仲人したんだよ。しかしおれが知っているわけがない。私のお祖父さんがそうとう山登りをしていて、山岳の二号に千島探険をかいていますよ。そのころは子供ですからね。日本アルプスなんか行っちゃいけないと叱られた。山岳部へ入ると駄目だとおれらのころは言われた。山岳部というと飲んだ記憶しかないなあ。いちばん悪かった。近代スポーツができなくてお嬢さんにもてない奴がみんな入っていた。

―これでもう加藤さんの槍・穂高に続くわけですが、「山と渓谷」十二号にくわしくのっていますね。

加藤　年代的にはね。その報告ではほんとに恥かしい。「アイゼンをつけてクルステの上をジックザック」なんていやらしい文章で。

福岡　慶応の部報がそうだったね。ドイツ語を日本語でつづったみたいな。（笑）

加藤　あのころはみんなそうだった。

―動機は。

加藤　やっぱりちょっとやってみたかったんですな。それといっしょに行った中畠政太郎が、どうだやらないかとすすめてくれて、中畠にひっついて行ったようなもんですね。あれ、中学五年かな。

福岡　ちょうどそのころスポーツアルピニズムについて鍋倉さんとか、ずいぶん議論してましたね。そういうことが出はじめた頃だな。

鍋倉　慶応の人はガイドをつれて歩いているわけですね。早稲田の人は学生山岳部としてあまりつれて歩かない。そこでちょっと慶応とは行き方が違っていたんじゃないですか。

―金がなかったからでしょうね。

加藤　上で立教とピッケルで打ち合ったなんてのは全くの嘘ですよ。（笑）第一、私は立教が縦走するなんて全然知らなかった。滞在中にいっしょになった。堀田さんとやり合うなど夢にも考えていない。新聞に学習院の加藤は西穂まで縦走した、と出たんで、帰ってからただの加藤じゃないか、よけいなことを言うなとひどく叱られた。学校のためになんて馬鹿な山登りがあるかと。どうしてあんなことになったのか、誰か新聞記者が考えたんでしょうな。

―どこかの馬の骨がやるだろうと、堀田さんが捨てゼリフを残し

第三十一回ウェストン祭
快晴の上高地の一日

「槇先生は昨日、徳本峠を越えて上高地へ入られました。今年八十二歳になられます」

ワー・パチパチ、拍手がわきおこる。それにこたえて椅子から立たれ、にこやかにおじぎをされる槇先生。私の後にいた若者いわく「八十二歳があの徳本を越えてきたのにオレたち、車でここまで来ちゃったな。オイ、来年は徳本を越えてみようか……。あの、すみません、来年のウェストン祭は何日ですか？」

何とうれしい質問だろう。思わず頬がほころぶ。

第三十一回ウエストン祭は快晴の六月五日、信濃支部の方達が中心となり今年も盛大におこなわれた。なんでも三十一回のうち晴れた日は今まで二回しかないとのこと、澄み渡った青空のもと、坂倉登喜子さん（ウェストン祭始まって以来、ヒマラヤへ行っていて不在だった一回を除き皆勤という）の率いるエーデルワイスクラブの歌声がひびき、午前十時、信濃支部蒲生氏の司会により開会。

まず奥原教永信濃支部長の開会の辞につづき、主催者側（日本山岳会）を代表して望月副会長のあいさつ。そして地元小学生によるウェストン・レリーフへの献花。このレリーフの作者佐藤久一朗氏も毎年、徳本を越えて来られるのである。いつお会いしても若者顔負けの行動力とお元気さには敬服する。つづいて協賛団体を代表して安曇村々長福島清喜氏のあいさつ。そして今年の記念講演は槇有恒氏と渡辺公平氏のお二人である。

まずは渡辺氏が日山協会長の立場としてよりはちょうど環境週間が始まったこともあり、日本山岳会自然保護委員長として話をされる。福島村長があいさつの時に使われた「山におじゃまする」という言葉を引用され、「われわれ、人間が山に登る時、常におじゃましに行くのだ、という謙虚な気持で行けばゴミを捨てたり、植物をとったり、できようはずがない。いつもこの言葉を大切にしたいで

ネパールの未解禁ピーク登山について

ネパール国内の未解禁ピーク（トレッキング向けの中高度のピークは除く）に登山を計画しようとする方に対してこのほど日本山岳協会の海外登山委員会において特別の手続きで申請することが決まりましたので、計画を持っている方は至急前記日山協にご連絡下さい。　海外連絡委員会

て涸沢に下ったとかね。

加藤　それを聞いておればピッケルをもって追いかけた。（笑）ぜんぜんないんだよ。当時弥一さんは大学でしょう。こっちは高校へ入ったばかりでしょう。そんなに強くはないですよ。これは当時の案内人の違いでしたね。立教は今田由勝。弥一さんに言わせれば、おれが中畠の面を札束で張ったと言うんだ。それで中畠が立教を蹴って加藤のところへ来たと言うが、そんなことは全然知らないですよ。あの年は珍しい雪の少ない年でねえ、朝槍を出て二時頃には穂高に着いていたですよ。

―そうですか。この写真でみるとけっこう雪ありますよ。肩の小屋なんか埋っています。

加藤　もう覚えていないなあ。

―ガイドとのつき合いの面からみると面白い。学習院の登山というのも上条孫人までですが、ガイド達にも、ひがむわけではないが、他の大学より学習院尊重の時代風潮があったのではないか、献身的なのもそのせいではないかと思いますが。連中、山でなきゃ口もきけないような人たちですから。

加藤　いまはいなくなっちゃったが、古い猟師、ガイドを充分に使えたのは大変にプラスだった。私なんか本当にいろいろなことを習いましたね。先輩よりもむしろあの人たちに習ったものの方が多かった。これは幸福でしたよ。いまは山登りの知識はあっても知恵のある人がいなくなっちゃった。戦後ちょっと変りましたね。

―戦後はねえ。去年なんかすごい山を登っている。

加藤　あれがつながったのは日光に山小屋を作った。これが続いてますね。まあ戦前に作ったんですが、そこで育った連中が戦後にですね。その後天狗（鹿島槍）で四人遭難したですよ。これは一大事と山岳部につまらん口を入れてね。これはやっぱり良くなかった。若い連中はやりにくくてしょうがなかったでしょう。

―それをきっかけに部報が出たんじゃないですか。「山桜」なんて、三冊しかないけれど。

加藤　ああ、出ましたね。あとはどうなってんだろう。あいつは金がかかるんだよ。昔、学習院は公達で金持だったが、このごろ貧乏人になったからね。

―チーフリーダー、サブリーダーなどはいつごろからできたのですか。早稲田あたりが早いんでは。学習院の山岳部にはなかった。

福岡　その時だけのリーダーはあったですよ。山行ごとによく知っている人を山の条件などによってね。

加藤　リーダーは性格的なものが多いんじゃないかな。教育とかなんとかするけれどそうでなくてね。リーダーは一年生からリーダーであるべきで、どうするかという判断は資質的なものじゃないですか。順ぐりに上っていって、前の日までミミズの数を数えたり、他人の屁のくささを辛抱していた奴がハッと前がいなくなったらいきなりチーフリーダーというのは恐いなあ。

もうこの辺でよござんしょうか。きょうは学習院の昔話を山崎君に聞いたようなものだな。どうもありがとうございました。

＊　＊　＊

以上は、昭和五十二年三月十七日雨もよいの宵の記録を整理したものである。たしかに学習院は育ちが良かった。〝物いひつづくれば、なお春雨はふるふる〟風情のその夜の親しく快い雰囲気を、そのままお伝えできないのは誠に残念である。

（油谷次康）

当日の出席者（順不同、敬称略）

加藤泰安、内藤政道、福岡孝行、鍋倉英夫、高橋暢行、大橋晋、菅野弘章、滝川清、皆川完一、北島光子、冨田美智子、岡沢祐吉、小川武丸、錦織英夫、千葉洋資、和久井正明、野崎直秀、鈴木末次、山崎徹、船橋明賢、川崎巌、島田巽、斎藤桂、中川恵資、右川清夫、設楽美徳、山本良三、山崎安治、武田満子、井ヶ田伝一、伏見紀子、越田和男、油谷次康以上三十三名

●座　談　会●

すね。」

本当にそうである。――山におじゃまする――忘れたくない言葉だ。

その後、いよいよ槇先生がマイクの前に立たれ「こんなに日ざしが強くては皆さん、背中がこげちゃうでしょうから長話はやめにして簡単にしましょう」

例によってユーモアある切り出しでウェストン氏と御一緒された頃の想い出をなつかしそうにお話しされた。これでプログラムはすべて終了。エーデルワイス・クラブ「別れの歌」をバックに閉会となる。

前の日、山研で高山前支部長より、このウェストン祭が現在のように盛大に行なわれるようになるまでの御苦労をうかがっていただけに、けっして派手でも、にぎやかなお祭りでもないが、この伝統ある素朴な行事に感無量の思いであった。それにしても、お天気になって本当に助かった。というのは前日、徳本を越えて来られるという槇先生と佐藤久一朗氏を途中までお迎えに行ったところ、お会いして槇先生が言われた第一声が「君が迎えに来てくれたの？　これは明日雨が降るよ。」そして「望月御夫妻もいらしてますよ。」とお話ししたところ「エッ奥様と一緒？　これは困った。明日はぜったい雨だよ」

もし例年通り雨だったら望月御夫妻も私も、皆にうらまれるところだった。

（池田智津子）

マッターホルン頂上部
画／宮下啓三

・自然保護情報・

プロの手から盗伐・盗掘を防ごう

葛貫一雄

最近、神奈川県下、特に箱根山中心の自然保護団体の活躍がたびたび新聞紙上に報道されるとともに、担当の県環境保護課の教育委員会等が積極的に指導協力して官民一体の保護活動をくりひろげているのは大変うれしいことです。箱根の場合、盆栽向きの盗掘が多いのだが、このほど、県教委では箱根町内の植木造園業者に警告的保護協力依頼書を配布したとのこと、まことに当を得た処置だが、もっと広範囲に実施してもらいたいと思う。二年ほど前、横浜市内にある有名な園芸店の店頭に、県天然記念物のハコネコメツツジが並べられているのを、心ある一市民が発見して問題になり、店主は恐縮して現物全部を箱根町に贈り返したことがある。店主や店員が掘ってきた訳ではないが、その間にプロが居る訳だ。保護活動は山の中でのみ行なうものではないという良い例だと思う。

盗伐の面においては、現地の営林署や地元保護団体等が取締っているだけでは手薄だと思う。近年、どこの山も産業道路か観光道路か不可解な道路が山の奥から尾根まで伸ばされて、盗伐・盗掘に無上のルートを提供している。いままでにたやすく近付けた山頂付近の古木（枝幹とも霧藻の付着したような美樹）等はすでに盗り尽して商売にならず、いまでは新しい道を利用して山の奥へ奥へと魔手をのばしている。地元の保護機関がいかに躍起になって取締っても、彼等は商売であり、奥山の古木や草花は天与の宝物と思いこんでいるのだから、盗伐・盗掘になんら罪の意識は持ち合わさない。とうてい取締り切れるものではない。

盗伐の場合、山中からどこかの都市にでも持ち込んでしまえば天下晴れて取引出来るのだ。試みに、各都市で行われる華道展に行って見なさい。こんなみごとな古木は、高山の山頂付近か、尾根筋でなければ見られないと思うほどの古木が堂々と活けられていることを。華道展ばかりではなく、ホテルとか旅館の玄関ででも見られる。

私が言いたいのは、日本の華道が路傍に咲く草花や、山中の樹木の枝を取ってきて部屋に飾って楽しんだことから始まり、その美風が発展して今日の一大華道文化を築き上げた。その功績には心底から敬意を持っているが、日本の国は狭い。開発に次ぐ開発で、奥山と名付けられるほどの高山そのものが少なくなってしまった現在、前述のような理由で古木は日増しに減る一方であり、高山植物も山麓の野草も絶滅寸前の物が多い。華道家の先生方、いつまでも残り少ない自然植物に花材を頼っていることを止めて、園芸生産者に花材を生産させ、その花材による新しい活け花という物を一日も早く創造していただきたい。永年にわたって恩恵に浴し続けて来た日本の大自然に感謝する意味からも。また私達保護団体は、そうした花材転換運動を起すと共に、諸先生方にも自然保護の重要性を認識して頂く必要があるのではなかろうか。

盗伐・盗掘防止の一環として都市にあっては、華道展とか店頭で自然公園以外の地にはないと思われる古木・植物等を見かけたらその出所とか、注文主とかを追求し、各地の地元保護機関と協力し合って事に当らなければならないと思う。

わたしたちのルームをわたしたちの手で!!

ルーム基金募集のお願い

「山」五月号、七月号ですでにご承知のとおり、日本山岳会は、今度、自前のルームを持つことになりました。購入資金のうち一千万円は会員各位からの募金によるものです。すでに会員各位には、基金募集を書面によりお願いしてありますが、会員各位の絶大なるご協力をお願い致します。

＊**募金申込み期限**　昭和52年10月末日

＊**募金払込み期限**　昭和53年6月末日

＊**振込み先**

・三和銀行本郷支店　普三五一―三七六一二

・協和銀行神田支店　普一二六―五七四五九三

・東京銀行本店　普〇〇一―一二五一〇五

・中央信託銀行本店　普〇一一―一二四九〇五

・郵便振替口座　東京三―四八二九

名義はいずれも日本山岳会

＊**募金方法**

・東京都、神奈川、埼玉、千葉各県に在住される会員　一口金一万円

・その他の地域に在住される会員　一口金五千円

いずれも分割払込みをお受けします。

支部だより――北海道支部

◇**総会**5月23日（月）18時　石田屋（北3西3）にて

・**役員選出**（52～53年度役員）

支部長　大塚　武

副支部長　山川　力

自然保護委員　辻井達一

企画（新妻徹）、会計（平野明）、記録（高沢光雄）

集会（浅利欣吉、酒巻吟一、川越昭夫、兼平治水、萩谷三枝子、柳田涼子）

監査（金井五郎、横江一郎）

・**行事計画**

1、支部山行　ペテガリ岳

来年は支部創立十周年にあたるので、その記念山行の事前調査をする。8月12～15日

2、お月見の会

手稲小屋にて　10月1日

3、小集会　11月26日

4、新年交礼会　1月10日

5、スキーバス　2月19日

ニセコチセハウス

6、弁華別ツアー　4月2日

・**事務所の変更**

北大植物園から江別市大麻高町二の一四、平野明方に変更

・**支部会費について**

年額五〇〇円とは今時に珍しい支部であるが、行事のたびに別会計とし、支部誌ヌプリも年一回程度ならば発行できるので、十周年が終るまで現在の会費を貫こうと満場一致で可決！

・**十周年記念行事について**

来年の六月中旬に映画会と講演会を、八月中旬にペテガリ岳の集中登山を企画したい。

・**その他**

山川副支部長から東京での総会の報告のあと、昨年度の行事報告と会計決算がおこなわれた。

（出席者）山川力、佐々保雄、朝比奈英三、金井五郎、淡川舜平、金田一勉、伊藤寿雄、石崎貞子、萩谷三枝子、柳田涼子、高橋正、石井忠雅、坂本美弥、渡辺盛夫、今健一、高沢光雄、浅利欣吉、平野明、新妻徹　19名

◇**第一回支部委員会**　6月27日

新委員の初顔合せと、今年度の行事の内容と担当について相談。なお金井五郎氏から支部の連絡所として改築なった秀岳荘二階（北13西4）の事務室に机とノート等を置かせてくださる旨、平野委員から説明あり、一同よろこぶ。

（出席者）大塚武、兼平治水、酒巻吟一、高沢光雄、浅利欣吉、平野明、萩谷三枝子、柳田涼子、新妻徹、石田屋にて

（文責・新妻徹）

ルーム基金応募ご芳名（1）

（昭和52年7月22日まで、敬称略、順不同）

〔**東京周辺**―一口金一万円〕

（20口）望月達夫、（10口）折井健一、額田敏、（5口）高遠宏、白籏史朗、三田幸夫、織内信彦、小倉茂暉、小倉董子、中屋健一、外山義夫、浜野吉生、渡辺公平、黒石恒、藤井運平、河野幾雄、伏見紀子、（3口）油谷次康、船越好文、吉阪隆正、神原忠夫、中川喜久雄、瀬名貞利、近藤恒雄、辻荘一、中保、山田博茂、（2口）神原達、斎藤桂、鏑木昇、植村直巳、冨田美知子、見学玄、安彦六郎、斎藤敏男、板倉勝正、田尾正、杉山叡、藤山愛一郎、（1.2口）近藤孝、（1口）武勝晃、梶正彦、山崎金次郎、若林隆三、市吉明子、梅本霊邦、沢村幸蔵、竹中昇、栗林一路、門井照子、菅野弘章、石井康夫、見沢繁幸、石渡清、村上智一、松田章、千葉重美、武村市太郎、根本知子、室越昌男、高橋正彦、大屋悌二、白川善員、小林重一、寺村栄一、森正二、鈴木耕治、千谷壮之助、矢田城太郎、岡沢祐吉、山岸和夫、副島広之、川津鉄礼、東京学芸大学山岳会、山県登、鈴木一弘、北博正、上野英世、小比類巻浩子、浜口欣一、橋本普七郎、柳沢シゲ子、吉田俊二、安藤昌宜、土井高夫、高田健夫、山田靖子、中山真明、D.F. Ryan、岩瀬浩、神保信雄、手塚晴雄、東京印書館山岳会、蓮田清、伊藤文三、春田直道、佐藤テル

小計二二三・二口　金二、二三二、〇〇〇円

〔**地方**―一口金五千円〕

（20口）直木重一郎、野口秋人、今西寿雄、（10口）尾上昇、今井友之助、片倉静江、原蕃、（6口）若林祐治郎、藤平正夫、（4口）北林嘉鶴子、（2口）平野隆司、金山淳二、坂口三郎、折元秀穂、石原国利、田中壮佶、岡部みち子、一原有徳、小田和友蔵、橋真琴、羽賀克巳、中村義、石井貞吉、鈴木清、中島道郎、（1口）川北仁、富田健一、水井謹作、阿達憲、尾崎忠次、斎藤惇生、磯野三郎、斎藤平七、力丸茂穂、荒木昭、坂井八郎、栗飯原健三、畑内明、脇坂順一、五十嵐篤雄、金井五郎、佐藤芳久、羽賀育子、森一彦、小田正男、九州歯科大学山岳会、久保利夫、小塩丘平、鈴木正規、秋月良造、浅野清彦、横田明男、渡会栄一、佐々木孝雄、橋本祥案、地木誠太郎、松長晴利、山川国雄、渡辺秀二、（0.9口）寺本滉

小計一八〇・九口　金九〇四、五〇〇円

合計　三、一三六、五〇〇円

＜**訂正**＞「山」七月号「ルーム基金募集のお願い」の項、買取資金の七、〇〇〇〇千円は七〇、〇〇〇千円、長期借入金五、〇〇〇千円は五〇、〇〇〇千円の誤まり。つまり買取資金は七千万円、借入金は五千万円です。

報告

第三五五回　ルーム小集会
JAC学生部
ドゥナギリ北稜

集会委員会・学生部共催

5月20日、午後6時から日本山岳会ルームでJAC学生部ドゥナギリ遠征隊の報告集会がもたれました。まず竹中隊員よりこの隊の組織のいきさつ、特徴等について説明があった後、登頂報告がなされ、酒井隊員のナレーションの入った8ミリ記録映画が映写されました。最後に牧野内隊長の補足説明があり、若干の質疑がかわされました。

大学山岳部若手OBを主体とした混成パーティーにより、安い費用で全員登頂を果たした成果は、今後の学生部活動に一つの刺激となったようでした。参加者は32名。

第三五四回小委員会
新入会員
オリエンテーション

集会委員会が行なうオリエンテーションは、今年で四回目になります。新しく入会してきた会員に対して、山岳会の活動や内容について知ってもらい、今後会員として十分に会を利用し、また盛りたててもらうための企画です。

毎年一五〇名を越える新入会員がありますが、その中のいったい幾人が山岳会の組織や成りたちにまで関心を持っているでしょうか。入会の動機はさまざまにあることと思いますが、主体的に会とかかわりをもってゆこうとする人達はごく少数に限られると思います。それは山岳会に新しく会員として加わってきた人達に対して何らかの形で会の成りたちや活動や、また利用法を説明する機会がほとんどなかった、ということにもよると思いますし、特に旧会員の方々をよく知らず、まったく孤立無援の人達にとっては、入会はしたが何をしたものかもわからずとまどう場合も多いと思います。少しでも会のこと、会員の人達のことを知ってもらうことは、山岳会入会を意義深いものにするためにも必要なことだと思います。

三月二十六日に行われた今年のオリエンテーションは前三回の形式をほとんど踏襲し、新たなアイデアも盛り込まれず、また宣伝不足のため参加者が非常に少なかったことは企画側に多くの反省材料が与えられることになりました。演者の山崎安治氏が話されたように、クラブライフは人と人とのつながりです。これから新しく会員として山岳会に加わる人を多く集めるということは、結局われわれ旧会員にとってのクラブライフをより一層良くするための活動でなければならないのです。さまざまな考えを持った個人が数多く会員の中にいるというだけでもすばらしいことです。あとは個人個人の積極的な働きかけで人々を識り、また生かしあい、山登りだけでなく生活そのものも豊かにしてゆけば良いのでしょう。

昭和五十一年度の新入会員は八〇八一番から八二三三番までの一五三名でした。

＜参加者＞

飯田睦治郎、石井康夫、神谷恭平、見沢繁幸、久保田康英、角田不二、門井照子、山森欣一、村嶋雅博、阿部慎二、北野良一、室伏偉男、三井貞彦、佐藤勝子、明大駿台山岳部佐原氏（以上新入会員）山崎安治、神崎忠男、小原俊、加藤隆、坂本伸一、児玉茂、和田誠一。

雪崩研究会
（一九七六年度）

遭難対策委員会
指導委員会

本年度の雪崩研究会の案内については、すでに本誌六月号に発表された通りであるが、昨年度の場合にも同じ趣旨でスタートした。

昨年8月31日、9月17日、9月30日、10月21日、11月11日、11月24日、12月15日、12月24日、本年2月2日の九回にわたり、テーマとしてとりあげたものは、主として次のようなものであった。

雪崩の発生機構
雪崩判断の物理的要素
雪崩遭難の心理的要素
雪崩遭難の事例研究
雪崩遭難の予防法

研究会の運営は、単に講義を聞くだけではなく、各メンバーがそれぞれテーマごとに調査し、これを発表して互いにディスカッスする場合が多く、理論的にも実践的にも理解を深めることができたと思う。しかし、残念ながら世話人の負傷事故により、宝剣岳周辺での実地研修が無期延期となり、画竜点睛を欠く憾みなしとしない。

（参加者・川上忠美、春日直道、田尻一実、須浪敏行、三渡忠臣、金坂一郎その他）

お知らせ

第一回JACノミの市

出品をお待ちします

初の試みとしてJACノミの市を開催します。みなさまのご協力をお願いいたします。

日時　10月29日（土）午後3時～午後7時。

場所　東京神田全電通会館

売場ご案内

最新入荷及び好評の本・報告書

- **八が岳研究**（豊島山岳会編）2,000円
- **会報　雪と岩27**（雪と岩の会）1,000円
- **巻機山の自然**（観光資源保護財団）2,000円
- **西ネパール第3の峰**（中日新聞社）3,200円
- **部報No.79**（日本ハイキング倶楽部）1,000円
- **遠い山の旋律**ーもんたにゅ叢書5（上野英世著）特製本2,500円 並製1,200円
- **日高山脈**ー自然・記録・案内ー（北大山の会編）2,400円

茗溪堂では一般山岳図書をはじめ、海外遠征登山の記録と報告書及び東京以外で発行されたものなど、幅広く「山の本」を取り揃えるよう努めておりますので、ぜひお立ち寄りください。

茗溪堂　〈山の本の売場〉お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

形式 バザーおよびオークション（底値は提供者が決定）

＜出品例＞

・記念石　三極（エベレスト、南極、北極）、マナスル、ナンダ・デヴィ、ジャヌー等の石。

・署名本　原則として定価販売の予定

・絵画　山岳画（ヒラリー氏署名のヒマラヤの絵など）

・年代もの登山具　山内のピッケル等

・ガラクタ登山用品　不要になった品、余っているものなど

・その他、いわれのあるもの、めずらしいもの、海外みやげ、民芸品等。

お願い　出品名を日本山岳会事務局までお知らせください。

なお当日は、軽食、ビール、おつまみなど用意しますので、ご歓談の場としてもご利用ください。（JAC会員は入場無料）

（集会委員会）

第10回図書交換会

恒例の山岳図書交換会が10月22日（土）と決りました。

昭和四十三年に「会員各自手持ちの本で、不要なものを持寄り、適当な値段で交換するなり買い求めたりしよう」という趣旨（会報二七三号より）で、第一回図書交換会が催されて以来、毎年欠かすことなく続けられ年を追うごとに盛会をきわめ、今回はその十回目を迎えることになりました。

本年は特に十回を記念して「稀覯本コーナー」・「百円コーナー」等の試みを含め、盛大に行ないたいと準備しておりますので会員多数の参加を期待します。

なお、毎回多くの会員からご協力をいただいておりますが、どうぞ本年もお手持ちの書籍・雑誌等のうち、会のために役立たせていただけるものがございましたら、交換ご希望のものを含めまして、一冊でも結構ですからぜひご出品下さい。

ご出品いただけます方は、締切日の10月5日（水）までに「出品書籍名・（希望価格）・会員番号・住所・氏名」をお書き添えの上、図書委員会までご連絡下さい。

（図書委員会）

写真勉強会

白籏史朗氏（日本山岳写真集団、日本山岳会会員、第二次RCC同人）を講師としてお招きし、「写真勉強会」を開催いたします。

＜写真勉強会＞

日時　10月25日（火）18時30分～20時＝白籏氏講演　20時～21時＝白籏氏を囲み親睦会（ビール、おつまみ付き）

場所　日本山岳会ルーム

会費　五〇〇円

＜現地写真山行＞

日時　10月30日（日）夜行日帰り

場所　南アルプス夜叉神峠

甲府駅前に30日午前3時30分に集合し、タクシーで夜叉神峠入口まで入り、夜叉神峠に登る。夜叉神峠で白籏氏のご指導のもとに写真撮影会を行ない、12時現地解散の予定

申込み先　電話または葉書で、日本山岳会事務所まで

注意　雨天決行、食事持参、懐中電灯持参

＜写真批評会＞

日時　11月15日（火）18時30分～20時30分

場所　日本山岳会ルーム

写真山行撮影の写真を持ち寄り白籏氏御指導のもとに批評会を行なう。

（集会委員会）

第三五九回ルーム小集会

越後の山を語る会

（藤島玄氏を囲んで）

日時　9月10日（土）午後5時～9時

場所　日本山岳会ルーム

第一部　午後5時～7時半

越後の山は、日本アルプスとは異り地味ではあるが、多くの岳人を魅惑しています。しかしそれも一部の地域に限られているのではないでしょうか。

越後の山のもっもっと奥深く、知られざる魅力を語りあう会を企画しました。

越後支部長としてご活躍された越後の山を語る時には忘れることのできない藤島玄氏をお招きし、地元の強味でのいろいろのお話をうかがいながら、その魅力を探ります。

第二部　午後7時半～9時

ささやかながら酒を酌み交しつつ越後の山と人の暖かさを……

会費は無料ですので、多数のご参加をお待ちしております。

第20回もみじ会

日時　11月12日（土）～13日。

場所　南アルプスを望む大日峠近くの青少年野外センター。

募集人員　60名、貸切バスのため満員になり次第締切。

集合　11月12日午後1時。国鉄静岡駅南口（登呂遺跡側出口）

軽山行の服装、雨具をお忘れなく。寝具は不要。会場は、暖房、大浴場、寝具あり。当日部屋割後入浴、懇親会。

翌日は朝食後現地解散。

A班　大日峠越え（口坂本温泉をへて静岡へ）

B班　大日峠旧道を井川湖畔に下り、大井川鉄道にて金谷へ。

参加費　静岡駅よりの交通費、宿泊費、翌日昼の弁当まで含めて五〇〇〇円。

ご注意　今回は二十周年ですので、もみじ会の一つの節目と致したい。貸切バス利用の関係もあり会費前納をもって参加申込みとします。住所、氏名、電話番号、会員番号、年令、性別、希望する班など記入のうえ、静岡支部宛お申込みください。参加者には、二十周年記念として、赤石岳の石で焼いた記念文字入りのグイ呑みをさしあげる予定です。

（静岡支部・山本朋三郎）

第20回登山技術講習会

主催　指導委員会

これから本格的な登山を志す初級・中級の方を対象にして、積雪期登山の基礎技術、露営から氷雪登山技術までの講習会を初冬の富士山で行ないます。

講習生の山歴や希望に従って、三人ごとの班編成をし、いずれもヒマラヤはじめ海外登山経験のある若手クライマーを一人ずつコーチとして配置いたします。

要項は下記のとおりです。懇親の意味を含めての講習会ですので男女を問わず参加いただきたくご案内申し上げます。なお宿泊施設の都合で、申込受付は三〇名に限りますのでご了承ください。（参加者多数の場合先着順とします）

〒113文京区湯島一の六の一　さくらビル7階、日本山岳会宛

日程　11月19日（土）～21日（月）

山2泊（山小屋使用）

場　所　富士山御庭小屋付近

参加者説明会・準備会等

10月18日（火）午後6時30分本会ルームで参加者説明会

11月16日（水）午後6時30分、本会ルームで準備会

行　程　11月19日午前9時40分河口湖駅（富士急行線）集合、五合目まで貸切バス。御庭小屋へ、午後トレーニング。

11月30日班別トレーニング、富士山登頂、夕食後懇談会。

11月21日トレーニングのあと山小屋に戻りミーティング。午後2時河口湖駅前にて解散。

参加費　会員七、五〇〇円、非会員八、五〇〇円（バス代・宿泊費・消耗品費・登山保険料等含んで）なお、申込み後個人的理由での解約には、参加費をお返し出来ない場合があります。

申込み　原則として3名一組として申込みください。1名で参加なさる方はその旨記入ください（申込書は各自記入し10月15日までに前記の本会事務所まで）

第21回山スキー技術講習会

主催　指導委員会

これから本格的に積雪期のスキー登山を志す方を対象にした山スキー技術講習会を企画致しております。詳細については、追って本誌上で御連絡致しますが左記の要領で準備を進めております。

期日

昭和53年2月11～13日

場所

鹿島槍高原立教鹿島槍山荘

コース

鹿島槍高原で基礎技術練習後遠見尾根のスキー登山

募集人員

30名（限定）

講師10名

医師1名

海外連絡委員会から『アルピニスムス』誌で原稿募集

本年一月以来"Alpinisums"は、インゲボルク・シェルューベル、並びにクリスチャン・フォン・ブリョンによって編集されています。ディートリッヒ・ハッセ、トニー・ヒーベラー、ピット・シューベルト、ワルター・ウェルシュ教授のようなレギュラーな寄稿者と共に、この「アルピニスムス」を世界の人々の国際的な機関並びに共通の演壇として再登場させたいと考えております。そこで国際的な情報の紙面のために広く外国よりの寄稿を求めております。提供されました情報に対しては、出版後、原稿料をお送り致します。またドイツ語圏以外から寄稿して下さった方には、「アルピニスムス」を無料で差し上げます。

トニー・ヒーベラー

インゲボルク・シェルューベル

クリスチャン・フォン・ブリョン

以上のように「アルピニスムス」誌への寄稿を求めて参りました。投稿される方は、海外連絡委員会宛にご送付下さい。

バンフ山岳映画祭

第二回バンフ山岳映画祭が、来る10月29、30日の両日、カナダ・アルバータのバンフで開催されます。この映画祭はカナダ山岳会バンフ支部、環境保全学校、バンフ・センターの後援によって運営され、山岳映画の質的向上に寄与する目的をもって行われます。

したがって出品する作品は、山に関係したもの、すなわち、登山、植物、動物、自然保護、山の人々並びにその生活等のものが要求されます。審判は世界的な映画製作者の討議によって行われ、受賞作品並びに委員会で選ばれた優秀作品は一般公開されます。

参加希望者は、海外連絡委員会に御連絡下さい。

＊　＊　＊

会務報告

6月理事会

（6月13日午後6時半　本会ルーム）

▽出席者　西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森久、皆川、鈴木、倉知、黒石、越田、田村、牧野内、嵯峨野、浅田各理事、浜野、山崎、金坂、小原各評議員

▽委任　山本、大森薫各理事、飯野監事

▽議案

・事務局職員交代について　（宮下）

庶務担当市村洋子さんが家庭の事情により6月末で退職、後任として高橋美津江さんに決定

＊

・ルーム建設資金募金関係　（望月）

今までのルーム委員会は発展的解消、新たに募金委員会を編成

委員長…西堀栄三郎

副委員長…望月達夫、折井健一

委員…山本健一郎、細川沙多子、伏見紀子、高遠　宏、宮下秀樹、山本良三、浜野吉生、神崎忠男、橋本　清（担当理事）

参与として現、前役員、評議員、支部長に委嘱。

顧問に槇有恒、今西錦司、早川種三、島田巽、辻荘一、三田幸夫、渡辺公平氏に委嘱。

・明治大学ラムジュン・ヒマール登山隊（一九七八年）推薦状交付願いについて　（橋本）　承認

・今年度の年次晩餐会（12月3日）会場について　（望月）

京王プラザホテルに決定　了承

▽報告事項

・高所登山　（田村）

9月22日～10月15日東ガルワール（タルコット）に遠征隊派遣。ネパール登山の申請は半年前でよいことになった

・山岳編集　（倉知）

71年号は72年との合併号として出す予定で準備中。70年号は7月中に出る予定

・自然保護　（鈴木）

大台ヶ原の実態調査で、荒廃の激しさを確認、マスコミキャンペーンを行なう。今後も運動を続ける

・青年懇談会　（浅田）

今年は涸沢テント中止。9月10日～11日、光徳ロッジで集会。

・婦人懇談会　（黒石）

8月20日ビールパーティー

・図書　（越田）

図書交換会10月22日、山岳図書を語る夕2月16日、山岳史懇談会3月16日

・書評　（大森久）

書評は図書委員会の一分科会として実施

了承

ルーム日誌（652年月）

1日（水）第356回小集会、山菜勉強会
6日（月）集会委員会
7日（火）青年懇談会
11日（土）高所登山委員会
13日（月）理事会
20日（月）集会、山研委員会
21日（火）自然保護委員会
22日（水）婦人懇談会
23日（木）図書委員会
27日（月）指導、集会、山岳編集各委員会

今月の来室者428名

夫婦会員

近藤 信行、緑（52・6・3）
鹿野 勝彦 茂利江（52・6・10）
原田 豊、晴紀子（52・6・29）

除籍取消

加藤 正己（52・6・18）
熊谷 政（52・6・24）

会員異動

物故者

三〇一二 沢田 武志（52・6・6）
八八四 山田 光男（52・5・13）

支部変更

七八四三 伊藤 正人（その他→東海）

退会者

五三六九 八巻 功（52・6・10）
四一〇三 筒井 計男（52・6・17）

＜お詫びと訂正＞

あまりの暑さに目がくらんでか先月号では誤植が多くて、会員諸兄姉にご迷惑をおかけしました。お詫びとともに訂正いたします。

会報「山」七月号（三八五号）のうち——

＊2ページ、ナンダ・デヴィ登山隊会計報告の協力者ご芳名中、河村英二は栄二、織田信彦は織内、相山元良は之良、村岡利夫は村関、富田美智子は冨田、北村嘉鶴子は北林、小栗嘉治は嘉浩、松田アキラは章、田部節雄は丹部、田辺言計は主計、市村章弘は市川にそれぞれ訂正します。

＊5ページ、図書紹介欄の「『北の山続編』を読んで」の筆者山田健児は山口健児氏の誤まりです。

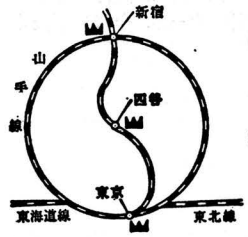
＊8ページ上段8行目の「床を移して」は「席を移して」の誤まり。

＊11ページ、会務報告のうち、各理事の分担中、山日記編集委員会＝皆川完二は皆川完一、医療委員会＝大森薫は大森薫雄、高所登山委員会＝田村泰は田村俊介にそれぞれ訂正。

昭和五十二年八月二十日発行
113 東京都文京区湯島一—六—一
利根川商事㈱さくらビル
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 西堀栄三郎
編集代表 大森久雄
(813)二二八六(代表)
振替口座東京三—四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736
●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地 TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五 TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階 サービスショップ TEL (352) 6564
日本信販加盟店
山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店
好日山荘
東京店・中央区銀座3－5－7　(561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3－4－6　(561)0966　スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目4－7　(364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4　(28) 3440

山の本

日高山脈
▲自然・記録・案内▼　第二版

北大山の会編　A五判三六二頁　定価二四〇〇円

日高は現在も往時の静寂さを多く残している数少ない地域であろう。本書は北大山の会メンバーがながい年月にわたり踏査、記録した成果をまとめたもので日高山脈の全容が収められている。登山に便利な新しい情報も収録

詩集 山の風物誌

伊藤秀五郎　A五判一四八頁　定価一四〇〇円

伊藤さんは自然科学者でありながら豊かな詩心を抱いておられた。巻頭に置いた「草原の生きものたち」は病床で最後に書かれたものであるが、こうした寂しさと明るさの融け合った風景を、今も……後記・装釘、串田孫一

北の山 続篇

伊藤秀五郎——菊判三二六頁　フランス装　定価二七〇〇円

名著『北の山』以後に書かれた多くの文章の中から、紀行・登山史、論説・随想・エッセイ、人に関するもの、自然保護等に選択分類し、おおむね発表順に配列編集した。装釘、カットは前著と同じ坂本直行。

山を見る日

川崎精雄　A五判三四八頁　定価二九〇〇円

渋い山登りの世界を綴った『雪山・藪山』の好著の続篇。著者の眼はさりげない紀行や随想の中で、自然の美しさや、さらに絵画や音楽、或いは人や書物についても幅広いつきあいを味わい深い文章でわれわれに示してくれる

山・人・本

島田巽　A五判三四七頁　定価二四〇〇円

山がとりもつ種々の書物とのめぐり会い。その本を通しての心暖まる人との交わり。書名になった『山・人・本』は上梓に当り新しく書き下ろしたもので、ながい年月、本に親しんできた著者ならではの興趣深いものです。

■出版目録送呈■お求めは最寄り書店で　茗溪堂　〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1　電話03-291-9442 振替東京8-24723